
星の夜の夢のそれ

加藤アガシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の夜の夢のそれ

【コード】

N3585H

【作者名】

加藤アガシ

【あらすじ】

あの頃の僕の話。33年に一度のしし座流星群が降る夜、僕はそこにひとり。

僕が小学2年生のとき、33年に一度と言われている『しし座流星群』がやってきた。

テレビはそれを、いかにもそれらしく騒ぎ立てていたけれど、当時の僕は、星なんてまったく興味がなかったし、そんなものどうだっ
ていいと思っていた。

万が一、星が見たくなってもプラネタリウムで十分だ。

涼しいプラネタリウムの中で、コーラを飲みながら、ニセモノの星
を眺める。

うん、十分クールじゃないか？

わざわざ暑い中、蚊に血を吸われながら、星を見るなんて、なんて
言うか、とても不毛だね。

それこそ、33年に一度の愚行だよ。

だけど、まったくナンセンスなことに僕の両親はわざわざ、33年
に一度のために、長野にキャンプに行った。

僕は当然ひとり、お留守番。

『馬鹿だな、父さんと母さんは。』

そんなことを思いながら、僕は一人の夜を満喫していた。

いつもは9時には寝てしまっけれど、その日は誰にも邪魔されない。

親友のタケシに借りたTVゲーム。

確か、三面のボスが強くて倒させなかったのを覚えている。

今になって考えてみると、誰かが造ったシステムに遊んでもらっているというのは、とてもとても気持ちの悪いことだけど、その日の僕はそのTVゲームに全身全霊を注いでいた。

あれほど、一生懸命だったのは何でかな？

あれ以来、僕は何に一生懸命になれただろう？

今でもその答えは見つからない。

あの頃の僕に聞くしかないな、きっと。

そして、『事』は起こった。

僕がゲームをしていると突然、誰もいないはずの二階から、声が聞こえた。

低く、どこか、さみしい声。

不思議と僕は怖くなかった。

父さんの声とよく似てる。

だけど、父さんとは違う。

もっともっと懐かしい声。

僕は導かれるように二階に上がった。

真っ暗な部屋の中で、

僕は僕と会った。

窓の外では、流星雨が降り注いでいた。

そして、あれから33年後の今日、僕はここにいる。

あの頃の僕とふたりで『星』を捜しに行くんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3585h/>

星の夜の夢のそれ

2010年10月31日04時30分発行